

〔新刊紹介〕

乾澄子・萩野敦子編

『狭衣物語』(変容)

須藤 圭

物語は、読まれることによって、様々な

ことを読者に想像させる。その想像のただ中で、イメージが更新され、多彩な異本が生まれ、異なる物語が書かれてきた。本書には、そうした物語の変容をテーマにした、十三の論文が収められている。

I 『狭衣物語』と(変容)

・六条御息所から狭衣へ——(離魂表現)に着目して(井上新子)

・『狭衣物語』飛鳥井の姫君の(変容)

——今姫君との対比から(塩見香奈)

・『狭衣物語』における髪を削ぐこと・

尼そぎになること——今姫君と女二宮をめぐって(佐藤達子)

・『狭衣物語』憧憬の地としての竹生島(本橋裕美)

・『狭衣物語』変容の方法——衣物語の中の(蟬)(井上真弓)

II 平安後期物語と(変容)

・『浜松中納言物語』における(空に満ちる恋心)——(転生)とのかかわりから(八島由香)

・『夜の寢覚』の音声楽——石山の姫君は天人の夢を見るか(宮下雅恵)

・『夜の寢覚』——(変容)する物語(乾澄子)

・『とりかへばや』における寒暖語と(風)のメタモルフォーゼ(山際咲清香)

・『とりかへばや』英訳本における(変容)——異性装への認識をめぐる親子の物語(片山ふゆき)

III 周縁の「物語」と(変容)

・『栄花物語』三后贊美評価の変容(野村倫子)

・『紫のゆかり』の(変容)——『いはでしのぶ』における前斎院と伏見姉妹を

めぐって(勝亦志織)

・近世琉球に再生する「みやびを」たち

——平敷屋朝敏の擬古文物語をめぐって(萩野敦子)

て

物語の変容の種々相を切りとった論文がズラリと並ぶけれども、そもそも、物語とは、先行する物語や和歌を組み替えながら生まれたものに他ならない。物語の変容を論じることが、物語そのものを語ることに

同義である。だからまた、これらの論文には、執筆者各人の、「物語」とは何か、という問いへのこたえも描かれているといっ

てよい。そして、それは、本書のテーマである(変容)が、狭衣物語を中心に、古典

文学の現代的意義を問う考察を多く重ねてきた鈴木泰恵の提案によることも深くか

かわっている。現代を生きるわたしたちにとって「物語」とは何か、「文学」とは何か。そのように問う読者にとって、欠かせ

ない一書である。

(翰林書房 二〇二二年四月 三二三頁

本体価格七、〇〇〇円)

(すじょう・けい 福岡大学准教授)